
超次元ゲームネプテューヌ～絶望はこの身に希望は我が手の中に～

燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲームネプテューヌ〜絶望はこの身に希望は我が手の中に〜

【Nコード】

N9114Y

【作者名】

燐

【あらすじ】

彼女達に希望を己は絶望を背負うと決意した少年は冥獄界で静かに眠っていたがある出来事をきっかけに再びゲームギョウ界に舞い降りた人間としてはなく女神の対極した存在である冥獄神「ブラッディハート」として混沌と破滅に進むゲームギョウ界を目の前に少年は何を思い行動するのかそして少年の前に最大にして最凶の敵が立ちふさがり史上最悪の封印がいまここに解かれる！

少年は仲間と協力し女神を救うことができるのか！？再び世界を守

ることができるのか！？ 『超次元ゲーム Neptune 又々 黒閃の騎士』の続編これはオリジナル多いよ！

プロローグ（前書き）

始めてしまった・・・まだ決めたところまで外伝進めていないのに
期末中なのに・・・とりあえず更新は遅めだと思いますがどうぞよ
ろしく願います！

プロローグ

ゲームギョウ界という一つの世界があった

別にめずらしくない至って普通の世界の筈だった世界を滅ぼす悪と戦いそして勝ちそしてまた悪が現れ女神と言う存在が悪を滅ぼすそして最後は一からやり直しいつでもそれで永遠に変わることのないそんな世界にある一人のイレギュラーにより全ての法則が壊された少年はただ守りたかったそして認めたくなかったゲームのようにはじめから、おわりまで全部が決められたこの世界が嫌だった

ゲームギョウ界にある四つの大陸

革新する紫の大地

『プラネテューヌ』

重厚なる黒の大地

『ラストイション』

雄大なる緑の大地

『リオンボックス』

夢見る白の大地

『ルウイー』

少年は渡り歩いたあるべき自分を探した・・・そして絶望した自分は世界の住民ではないイレギュラーだとだけどその中でも自分の居場所を見つけることができた彼は頑張ったがむしやらでただ守りたい一心に全てが無駄だということを知るまで知ってしまったとき彼は再び絶望したしかし彼を支えてくれる仲間がいた。

だから頑張れたなんとも真実に打ちのめされてもそれでも突き進んだ自分がやっていることに正しいなんてないけど自分はそれがいやだから

一緒に訓練をした彼女を

一緒にゲームをした彼女を

一緒に読書した彼女を

一緒に笑い合った彼女を

居なかったことになんてできない

そんなことは求めれないと自分は人間ではないナニカでもこの思いはこの感情は人間だと信じているから

少年は力を欲したそれが禁断の力でも構わない彼女達を守れるなら
それでいいそして少年は『神』になった

絶対的な武装を手に
揺るぎなき信念を心に

それは同時に世界を守護する彼女たちと対極になろうとも彼にもは
や迷いなんてなかった

そして少年は

定められた因果を
変わらない運命を
決められた物語を

そして世界すらも破壊した

超次元ゲーム Neptune 又く絶望はこの身に希望は我が手の中に・
・ 始ります

プロローグ（後書き）

今日はこれ含めて二回更新する予定

絶望の始り(前書き)

今日寒い・・・っす

絶望の始り

そこは地獄というには優しくゴミ場というには無残な場所そのなかで漂う『悪』があつた

その『悪』には拳があつた無骨で人のような五本の指でけれど繋がっているのはモノはあまりにも異常な姿だつた。

四つに分かれた黒いコートのようなものに人らしき顔を全身に浮き出ている身体その存在に顔はなく代わりに胴体に血走つた一つの眼が迫りくる四つの閃光を捕らえていた

―――ゼブル・アンドロメダ魔皇の神域

それは何かに繋がっていたその根元には全身を漆黒色の飾りげのないコートで覆つており男なのか女なのかそんなことも一体何を見ているのかもさえ分からない

「はああああ!!」

「てえええい!!」

紫と黒の閃光が迫りくるその誰かは眼中になさそうにただ立つ尽くすが彼を根元に生まれた『悪』はその剛腕を振り下ろされようとした刃を弾く

「そこです!!」

両手を塞がれガラ空きとなった背後に緑の閃光はその手に大型ランスを手に大気を貫きながら疾走するが四つに分かれた布切れは意思を持つようにランスは包みこみそのまま地面に所有者ごと叩き込んだ

「叩き・潰す!!」

更に上空に戦斧を持った白が流星の如く降ってくるが一つだけの眼が白を写した瞬間、極光が放たれ反撃も許さず白は地面へと落ちた

「ブラン！」

紫が仲間であろう白に声を掛けた瞬間抑えていた拳が太刀を弾きそのまま裏拳を叩き込まれ壁に埋まり沈黙する

「……っつ！」

もう一人拳を抑えていた黒が舌を打つ誰かはそこで誰かはこの戦闘で初めて見て黒をそして……

「……潰れる」

そう呟いた

「ぐっ……」

自分の武器ごと地面に叩きこまれた緑が置き上がる目の前の光景に

目を疑った白は全身を焼かれたように赤色になり黒は壁に叩きこまれ沈黙化しており紫は地面を一体とされ動く気配を全くさせない・
・自分を覗き全滅・・・その言葉が頭を過った

ぱちぱちぱち

紅い大地で突如手をたたき合う音が響くその音に誰かはその方向へ向くそこにはまるで天使のような翼を広げその逆な邪悪な悪魔のような笑みを造りその手には死神を思わせる大鎌が握られていた

「見事だ」

ただ一言呟くその反応に誰かは喜びも悲しみも感じない顔も全てが見えないほどにフードを深く被っているからだ

「こいつらは・・・捕縛するでいいんだよな」

誰かは彼女に問う。彼女は満足げに頷き誰かは緑とは違う紫を叩きつけた壁に向かって歩き出した

「――！」

まずいと緑は痛む身体を無理やり動かそうとするあそこにはあの子がいる！

「ふっ・・・」

後ろから零れる女性の声振り向きことさえ許されず緑は意識を殺さ

れ地面へと墮ちる

「に・・・げ・・・て・・・」

紫が必死に声を上げる自分以外の誰かに訴えるように誰かは紫の前に立ち自分の背後に浮かぶ『悪』に指令を送る

「・・・ね・・・ぷ」

無情にも言い切る前に『悪』の拳撃は紫に叩きこまれた強大な力の前に壁に亀裂が入り紫ごと空中へ放り投げられる

「お姉ちゃんー！！！！」

紅い大地の中で一際目立つ桃色が砕けた壁の中から姿を現す紫は空中を数回回り地面へと墮ちるもつすでにその目に光は灯ってはない

「ひっ……………！！」

前を向けばそこには『恐怖』があつた女神達四人を相手に圧倒しその背後には自分の姉に止めをさした『悪』

「おねがい……………もう、やめて……………このままじゃ……………！！」

祈るように手を合わす彼女を見ながら誰かは興味無さそうに背後の『悪』に指令を送る

「ゲームギョウ界が……！」

ゆっくりと拳を彼女に狙いを定める抗う力を持たない彼女はただ訴えることしか出来ない

「壊れちゃうよ　　……！！！」

拳は降り下ろされ辺りに静寂が訪れた

20XX年

ゲームギョウ界は再びマジユコンネの脅威に曝されていた

設立された犯罪組織『マジエコンヌ』と呼ばれる謎の組織の出現。

違法ディスク『マジユコン』と呼ばれる奇妙なアイテムを大陸全土にばらまきそれによりシヨップは枯れ

クリエイターは飢え、あらゆるギョウカイ人が全滅したかに思えた。

無法世界とは縁遠いゲームギョウ界も、マジエコンヌの登場以来、人々のモラルは低下の一途をたどるばかりで、もはや大陸人口の大半はマジエコを崇めつつある

取り締まるべき政府も何故かスルーしまくりで、とにかくゲームギョウ界は滅茶苦茶に、そこらの民度の低い無法世界になりつつあった。

そんなゲームギョウ界の対になるモンスター誕生の裏世界『冥獄界』では……

絶望の始り（後書き）

四女神を相手に超余裕のチート、マジック・ザ・ハードが優しい？
とうか柔らかいです原作とはちょい違いますから生まれが

目覚める冥獄神『フレッジイハート』(前書き)

ウサギコウジ・・・トオナ

目覚める冥獄神『ブラッディハート』

肉が裂ける音

断末魔の雄叫び

異形の咆哮

魑魅魍魎の存在が蠢きただ渴きを潤すためただ殺し合う

生きるために

快楽を得るために

自由を得るために

そんな理由があるかも知れないかもしれないだがそんな混沌とした世界でも唯一モンスターが近づけない場所があった

名前はないただ中世を感じる屋敷だが目が痛くなるほどの真紅に染まっているだけ

「……………」

誰もが硬直する黄金と真紅の玉座に座る黒髪の少年

殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ

ただ永遠と押し付けられる怨嗟の輪転ははや四年、人の数だけ光があり闇がある

「四年……四年もたったのか」

自分にとってはもつと長い時間を感じられた一日一日が地獄で肉体についていけない精神の性でなんと壊れかけたか（……）数えるだけでバカバカしい。それでもあいつ等が笑っていられると思えば……その信念だけが自分を『零崎 紅夜』を支えてくれる唯一の柱

「あいつら、元気にしているかな」

四年も会ってないこんな世界にいたらただ負の念のみしか感じなくゲームギョウ界で起きていることが分からない

ただ……三年前からゲームギョウ界から送られる負の念が多くなっていることが気掛かりだ。あいつらとくにネプテューヌ又は仕事してるだろうか

ふと、この屋敷のテラスに出て外の風景を眺める血の色をした夜、闇色の大地に蠢く紅の影、ここはゲームギョウ界が天国としたらここ（冥獄界）は地獄だな

「……………ん？」

暫くこんな汚く穢れた風景を眺めていると大地に蠢いていたモンスターの姿が消えた

「違法ディスクまだ残っていたのか……？」

ネプテューヌ達の前に女神をしていたマジコンネがばら蒔いたという違法ディスクそれは元々アイツが作ったものでゲームギョウ界と冥獄界の境界に干渉し冥獄界のモンスターをゲームギョウ界に転送させる為のアイテムだもう全て破棄させたと思ったのだが・・・

「……俺がいかなくても大丈夫だろ女神がなんとかしてくれる」

そんな考えの中、再び玉座に戻り座る今は冥獄神として人々の絶望を受け入れないといけない。その行為に慣れないといけない

慣れない限りは俺はゲームギョウ界に行けない迷惑がかかる

相変わらず耳元に訴えられる人々の怨嗟にため息がでるこの世界に来て少しアイツはこの世界を去ったアイツこの両方の世界の住民ではないしあっちもあっちでかなり多忙なそうで四年ぐらい出張と元気良く去っていった

「……………」

後ろに体重を掛け赫灼に輝く自分の得物を眺める。これが今の自分が送っている日常

.....

「ん・・・？」

昏寝でもしようと思ったがまた負の念が響いた・・・これは嘆きだ
悲しき助ける求める声、今までも聞いてきたその嘆きに何故か俺は
その声に耳を澄ます

.....

とても、とても懐かしい声だった

「.....ごめん言いつけ破る」

尋常な無いことは分かっただから俺はアイツに貰った不思議な形を
し紅い宝石が埋め込まれたイヤリングを握り呟く

空いている手を上空に突き上げると同時に馴染んだ重さを感じそれ
を回転させ持ち手を交代し左肩に置く

腰に巻き付けているホルダーに二つの緋色の拳銃があるのを確認し

前方に手を向ける

その先には闇が発生してそれはブラックホールのように渦巻き始める

「……………」

ふと横に飾られていた悪趣味なデザインの鏡が目に入るそこに写っているのは自分の変わり果てた姿

右顔と銀から黒に変わってしまった髪を残し肌を全て隠すように包帯で巻かれている自分の姿

人々の怨嗟とモンスターの獣吼によりまともに寝れるわけなく目の周囲は黒ずみ死者のような蒼き瞳が冷たく光る

「あいつらは……………変わらないでほしいな」

そう願いなにか異常が起きたであろうゲームギョウ界に旅立つ

だが俺はそのとき知らなかった守ると決めたネプテューヌ達は囚われの身にゲームギョウ界はマジコンネの手により無法と化した世界になっっているなんて

そんな絶望を希望に変えるための物語が今ここ始まった

目覚める冥獄神『ブラッディハート』（後書き）

アイツはまだ出て来ないです忙しいですから

次回は・・・プラネテューヌかな？ラステイションでも回しやすい
ですが・・・迷い中

知った現実（前書き）

テスト勉強しないと・・・

知った現実

目を開ける豊かな野原に所々が白い蒼き空、思わずきつくフードを被るいままで人工的な光ではなく自然の光を見るのは四年ぶり今の俺にはそれは明るすぎて眩しいものだった

「・・・っ」

全身に重りが乗せられたような感覚が発生するゲームギョウ界の負は冥獄界である程度処理されてくるが俺がゲームギョウ界にいる間はダイレクトに通じ子供の声、大人の声、老人の声、人それぞれの心の中にある欲望や憎しみの声が頭に響き、思わず地面に膝を付けてしまう

「・・・黙れ・・・！」

振り払うように地面に拳を叩き込む人外となつた俺の力はすさまじく俺を中心にクレーターが形成される

「行かないと・・・！」

自分の記憶が正しければここはバーチャフォレストということは俺がいる大陸はプラネテューヌの筈だネプテューヌとネプギアが居るはず・・・！

「ヌラ〜」

要約動かせるようになった身体を起こしかすかに残る記憶を頼りに

街に行こうとすると草むらからゼリー状のモンスター、スライ又が飛んできた

ぴよんぴよんと撥ねるスライ又に少し愛くるしさを感じながら俺は脚を進ませる・・・モンスターは俺を攻撃することが少ない。それは冥獄界を管理している俺だけの特典で元々モンスターは人の負を具現化したもので俺はその負を管理するものだモンスターからすれば俺は同族に見えるらしく縄張り荒らされたかと思われ攻撃されるからただの共食いかそれ以外でモンスターに攻撃されることはほばないそしてある程度のモンスターなら会話もできる

「街はどっちにあるんだ？」

「ヌラ～ヌラヌラ～」（南に行った方にあるよ～）

よく見るとこのスライ又怪我をしている切り傷と何かに刺さられたような怪我だ

「そうか、ありがとう。その怪我はどうした？」

「ヌラ！！ヌラヌラヌラ～！！」（いきなり襲ってきた三人組にやられたんだ！仲間と合体したけど全く歯が立たなかったんだ！）スライ又は数少ない合体できるモンスターだ一匹だと弱いが集まればそれなりに強くなるそれを倒したということはそれなりの実力者ということだ

「それは運が悪かったな」

「ヌラ、ヌラヌラ・・・」（全くだよ女神が不在の時チャンスと思

っただけど……)

「……さて、女神が不在？どういうことだ」

とても聞き逃しのできないキーワードに思わずスライヌを驚掴みにする

「ヌラ〜〜！！！」(痛いよ〜〜！！！！もつと優しく！！！！)

「言え」

そんなことはどうでもいいいくらサボリ魔のネプテューヌでもそれは異常だアイツだって自分の大陸の人の事、大切に思っている筈だ！

「ヌラ〜〜」(不幸だ〜〜)(泣)

聞くところによると三年前から突如自分を倒しに来る女神が来なくなつたとのこと風の噂ではプラネテューヌも含めた四女神が行方を晦ましたこと

「ヌラ！」(あいた！うう……)

あまりのことに思わず手を離してしまう三年前……いつもより冥獄界に負が多く流れ始めた時期だ……！

「ヌラ・ヌラヌラ〜〜！！！」(一体僕がなにをしたん……う！？力が溢れ……！！)

「・・・つち」

とつさにその場から離れる地面には先ほどのスライヌが俺のいたところに突進をし地面にめり込んでいた

「！！！」

もはや先ほどのスライヌとは違い理性をなくしている・・・俺の、性だ。俺はゲームギョウ界の負を司るハードだそしてそれは同時に負で具現化しているモンスターに力を無自覚に与えてしまう俺はハードとしてまだ未完成近くにいるモンスターに無造作に力を与え本来のモンスターへと覚醒させてしまう！

スライヌの突進を避けながら再び思考を動かす。冥獄界にいるモンスターは元々理性のない獣だがゲームギョウ界に送られると同時に自我が生まれるそれはゲームギョウ界に光があるからだ信仰の力によってモンスターという闇は一部浄化され弱体化し感情を生み出すだが・・・俺はまだ未完成であるがゆえに近くいるモンスターに負を勝手に入れ込んでしまうそのことにより冥獄界にいる本来の姿に変えてしまう・・・俺は俺自身をコントロールできていない！

「！！！」

「・・・ごめんな」

先ほどまで明るく話してくれたスライヌの姿はなく禍々しいオーラを放ち見る者全てが敵だと言わん限りに襲ってくる俺は背中の大剣『紅曜日』を抜き突っ込んで来たスライヌを一刀両断した

「・・・街には行けないな」

負は新たな負を呼ぶ俺が街にでも行けばモンスターは街に襲撃してしまう可能性があり俺の近くにいるモンスターは凶暴化してしまう・・・誰かに迷惑がかかる

「・・・・・・・・」

自然の日光と自由に生える草花その全てを俺は穢すことができるいや・・・現在進行で穢している（・・・・・・・・）

「畜生・・・・・・・・」

これはまるで自分がゲームギョウ界の敵じゃないかと自分に嫌悪感を抱く・・・けど、俺はあの悲しき悲鳴を真偽を確かめるまで冥獄界に戻るわけにはいかないあの時の声は・・・

――壊れちゃった――！――！

確かにネプギアだった

知った現実（後書き）

ゲームで紅夜を言えば特殊能力でモンスターに見つからないだが戦闘時相手がモンスターなら無条件で汚染モンスターになるっと言った感じですよ（分かりにくかったらスイマセン）
そこにいるだけで災害を呼んでしまう紅夜が進む道は・・・どうぞお楽しみに

それは血の凍るような(前書き)

こっちも更新します・・・短いけど

それは血の凍るような

どれだけ足を進めたのか分からない
どれだけ屍を踏んだのかは分からない
どれだけ返り血を浴びたか分からない

言えることといえば俺は牙を向けて来るモンスターを無差別に殺戮していることぐらいだ

月夜の光はモンスターの体液を浴び淀んだ刃は元の紅さを取り戻しさらなる旋風を生み出す

「はぁ・・・」

負に還されていくモンスターを見ながら一息、あれから出来るだけモンスターから情報を得ようとするがすぐに負に汚染され暴走し襲いかかってくるそれに反撃し殺す。

今日はそれしかしてないような気がするがそれなりの情報も手に入らない。分かったことと言えば復活しそうな犯罪神マジコンヌを阻止すべく四女神はギョウカイ墓場に向かいそして……今があるということ

残された希望と云えば

プラネテューヌの女神候補生ネプギア

ラストイシヨンの女神候補生ユニ

ルウィーの女神候補生ロム、ラムである

女神を救うために彼女達は動き出していると思いたい協力もしたい

けどまだ冥獄神として不完全な俺が近くいれば無条件でモンスターが襲いかかってしまう……自分には自分を守るだけの力は確かにあるが厳しい戦いが予想されるそのとき俺は全てを守ることが出来るのか……その答えは出ない

だからできるだけ遠くで守ろうと俺は心に決めた

「ぐぶっ……！」

精神と肉体は繋がっている精神が傷ついていけばおのずと肉体にも影響する。口から鉄の味が沸き出てくる

「……今この時でも俺の身体は負に犯され続けている。俺にはそれを全て受け止められるような器は出来ていない。俺は何をしようにもずっとこれが呪いのように俺の身体を浸食し続け動きを遅くしていく

「……つまるところ言えば俺は足手まといとなんら変わらない

「……おれ、何しているんだろっ」

近くの木に体重を掛け自分の前に広がる景色は魑魅魍魎の死骸のみだけが映った。この周囲のモンスターはほぼ片付けた火照った身体を夜の肌寒さで静めていく

ただ不自然を感じるほどの静けさだけがその場を守護していく

「……！」

一瞬、その場から離れ背中に背負っている紅い刃が特徴的な大剣『紅曜日』を抜刀し闇色の槍を切り落としていく

「……あなたが如何物ですか」

全身の血流が止まったような気がしたそれほど自分の目の前の女性は綺麗で美しくなによりも禍々しいモノだった

「……誰だ！」

いきなり攻撃をしてきた彼女に紅曜日の剣先を向ける。宙を舞うように浮かぶ彼女の表情はまるで偽物を見るような貌だった

「如何物に答える名前はありません」

その言葉と同時に胸がやけどしたのかと思うほど熱くなったゆっくり視線を下ろすとそこには誰かの手が生えていた

「ああ……肉体はそのままですね、恋しい愛おしい私の私だけのご主人さま」

金縛りでも受けたように身体が機能を停止させるそれと同時に自分が心配すら気付かず後ろを取られたのだと理解する

「……でも中身は如何物、なんと悲しい、なんと汚い」

ゴミを捨てるように投げられる抜けた胸から血が噴水のように飛び

散り円環の軌跡を描きながら木に身体を叩きつける

「だから……」

手を水平に向ける彼女、それが号令であるかのように空を受けつくるほどの闇色の剣が形成される

「……死んでください」

迫りくる数えるのもばかばかしいほどの剣の嵐を前に零崎 紅夜は
ゆっくり口から流れる血を吐きだしながら告げた

それは血の凍るような（後書き）

次回はいきなりガチバトル！・・・紅夜はゲームギョウ界を守ること
ができるのか！？

月夜に刻まれる鮮血の十字架（前書き）

どうも、燐です。やっとモンハンやっとG級来ました……フッしんどかったZ E

けど最初の依頼がナバルデウス亜種とか……おかしくない？僕はおかしいと思う

見たときまずいきなりラスボス級キタ

（。。。）

！！！！！！と叫んでしまった。・・・滅茶苦茶苦労したな……

月夜に刻まれる鮮血の十字架

――それは私が夜風に当たっている時でした

母さんはいつものように出張で遙か遠い異世界に行きました。けどそれは仕方がないことでも私の隣にはいつも兄さんが居ました……そう三年前までは

定期的に私達は連絡を取り合っていましたでしたが突如起こった地殻変動により私達が住むプラネテューヌとラステイション、ルウイーの大陸はお互いをぶつかり一つの大地になってしまったのです。

勿論その出来事により民衆は大混乱に陥りましたが女神たちの尽力により無事に収まりました……しかしゲームギョウ界の中心に現れたのですギョウカイ墓場が……それは母さんが嚴重注意と言っていた絶望神『デイスペア・ザ・ハード』が封印されている魔の地それと同時に私の兄さんである超越竜『ゼクスプロセス・ドラゴニス』の守護の大陸でもあってギョウカイ墓場が姿が見せるということは兄さんの身に何か起こったということ

ギョウカイ墓場は言わば煉獄、死んだモノが一度その大陸にあつまる大陸そこから死んだモノは一ゲームギョウ界（天国）に再び転生し――冥獄界（地獄）に墮ち永遠の苦しみを味わうシステムになっている

なのでゲームギョウ界、冥獄界の間にあるギョウカイ墓場がどちら

かに姿を出すことは絶対にありえない。更に災厄が降り注ぎ私は全ての女神たちにギョウカイ墓場への調査を依頼しました……きっと私はそのとき焦っていたギョウカイ墓場の守護竜である兄さんの安否、世界の司書として母さんにこの世界を任された期待感……あのとき、少し冷静になっていれば女神達は全員帰ってこれたかもしれません

残された希望は女神候補生……と冥獄界のハードである零崎 紅夜ブラッディ・ハートで女神候補生は女神たちの代わりにシエアを集めることができるとしてブラッディ・ハートは困った時に必ず手を貸してくれる頼もしい人だ……しかしブラッディハートは今でも姿を見せない。

しかたがないことだと思ってしまう。母さんは言った「完成しないと壊れていく」と冥獄神は世界の負を背負う器それが不完全であるならば今のゲームギョウ界に邪を撒き散らす存在に本来の意味で冥獄神はゲームギョウ界の敵となってしまう。完成するには最低でも五年は掛かると言っていたまだ紅夜さんが冥獄界に行つてまだ三年……このままではゲームギョウ界の未来はどうなってしまうだろうと未来に恐怖を抱いていたそのとき時でした

―――夜空を浸食するように広がる紅い翼を見たのは

闇色の刃が嵐となって降り注ぐその剣先にいた彼はその手に持つ銃の形をしてながら刃が銃を飲み込む形状をした二つの双剣銃を振り下ろし全てを弾く

『ジエノ イド・ーゲン』

壊れた声音機のような不気味で不可解で不安定な声が呟かれるノイズの紅い翼は形状を変化させ鋭い鞭となり彼女に襲いかかる彼女は踊るようにそれらを華麗に避けていくが彼は口が緩んだ瞬間、彼女に赤い雨が降り注いだ

『……………』

彼、零崎 紅夜はその光景は見ていた突如襲いかかってきた謎の美女、人の形態だと勝てないと判断した紅夜は冥獄神ブラッディハートとなり反撃に映った。込められた魔力が爆発し煙が空中を泳いで襲ってきた彼女を目視では確認できないしかし感じる彼女の気配を

「……所詮、如何物……弱いですわ」

月光のように精彩でしかし禍々しい狂気を感じさせる琥珀色の双眸は穢れたモノを見るような眼差しで紅夜を見下ろす。彼女が黒薔薇が描かれている機動力がある着物は傷一つなく紅夜の攻撃が無駄であつたことを証明するように靡く

『……………』

獲物を握る力が強くなる今自分の目の前にいる存在は自分が戦ってきたモノの中では迷いなくトップクラス、嫌なことに今の自分は万全ではない今現在でも身体が負に耐えきれず崩壊クラッシュしている不生死であるおかげで再生するがまた崩壊していき体中業火で焼かれているような激痛が走りまわる

「それにしても……醜いまるで合成獣キメラのよう」

彼女の言葉に息をのみ込む冥獄神化した今の自分は違う存在へと変

わりその影響で巻きついている包帯はない隠されている所から映し出されるのは人の顔らしきモノだったり一部だったりそれは子供であつたり成人であつたり老人であつたり性別関係なしに紅夜の身体を浸食するように浮かんでは消え浮かんでは消えを繰り返している

彼女の言うとおり今の自分は一醜い（化物）に近いモノだった

「……………分かりましたわ。ご主人様」

唐突に口を開く彼女まるでその場にいない誰かと話しているようで再度紅夜を見下ろす

「全ては我が恋しい愛しいご主人様の為に」

彼女の回りに闇が集結していき一本の巨大な槍らしき形状をしていく紅夜は冷や汗をかくこの肌を刺すほどまで感じる力、それは一プラネテューヌが吹き飛ぶほど（……………）の力の塊

双剣銃が鮮血を零すような火花を散らす紅夜はそれを交差する。紅夜の身体は負が騒ぎ立てるように蠢き始めそれと同時に身体の一部がまた崩れるまた再生される（……………）気が狂うほどの激痛を歯を立て堪え紅夜は彼女は動いた

「デイストラクシオン・ベイ 終末を呼ぶ天魔の槍」

『ブツデ・ロス!!!』

鮮血の十字架と滅亡の痛みはぶつかりゲームギョウ界を震わすほどの衝撃波を巻き起こした

月夜に刻まれる鮮血の十字架（後書き）

えっと勝敗はまあ……引き分け？です。

ココだけの話、彼女は1%ぐらいしか実力だしていません

空並の超チートですあとヤンデレですヤンデレです大事な事なので

二回言いました。次回は多分原作キャラ……でると思う

何もできない(前書き)

本日一回更新!明日も頑張ろう!

何もできない

夢を見たとてもとても懐かしくて楽しかった思い出

みんなで笑って

みんなで遊んで

みんなで困難を乗り越えた

そして彼は再会の約束をして私達の前から姿を消した。一生の別れではない早ければ5年後に再開できるその言葉を信じ今まで自分達が今噛みしめている平和を今自分が見ている光景を彼に見てほしかった……けど復活したマジユコン又のおかげで彼が必死で本当の意味で平和にした世界は滅茶苦茶になってしまった

自分の親友である二人は仲間と一緒にギョウカイ墓場に行ってしまった……そして三年間音沙汰なしその間にマジユコン又の信教は広がり女神達の信仰は滅る一方では私はギョウカイ墓場に向かった……
看護師ナースになった親友が付いてきちゃったけど必死で搜索して親友である女神二人と他の女神たちも見つかつたいざという時になけなしのシエアを結晶したシエアクリスタルで回復させようと尽力したけれど謎の敵により私達は一人だけしか助けることが出来なかった

「……あいちゃん？」

よほど深刻な貌になっていたかの心配するよ様に顔を覗かせる親友に今できる精一杯の笑顔で大丈夫と返す。親友は渋々と引いてくれた彼はこれないと考えいい……けど心の中では来てほしい助けてほしいいつも困った時は近くにいてくれた彼と会いたい

そう思っている間に一つの部屋の間に立つ朝突如、プラネテューヌの教祖であるイストワール様から呼び出しが掛かったのだ用件は詳しくは知らないが女神候補生であるネプギアも一緒にでないことに違和感を覚えつつ部屋の數位回やさしく叩く

「……………」

幼さが残る声を聞きドアノブに手を回し開けるそこには本の上に乗った妖精のような容姿であるイストワール様がいた

「おはようございます。アイエフさん、コンパさん」

私達もそれに習い朝の挨拶を返すイストワール様の顔は真剣そのものでありこれから話されることが一体それだけ重要なことかと語っていた

「イストワール様、用件はなんででしょうか」

「昨夜、紅い翼を見ました」

突如言われたイストワール様の言葉を理解するのに数秒時間を必要とした紅い翼それから導き出される答えは……

「まだ調査中ですが昨日の何らかの戦闘があつたと思われる場所から紅い翼が見えました彼である可能性かモンスターである可能性は二分八分ですが一応貴方がたに報告します」

今でも覚えている紅い翼を広げ蒼穹を駆ける彼の姿は目に心に焼き付いている……会いたい！

「それは……「うさんですか？」

「調査中です」

震える声でコンパが問うがイストワール様はそれを切り捨てるように言う

「けど覚えておいてくださいー彼が敵となるか味方となるか分かりません」

その時、私はイストワール様の言葉を理解できずにいた

「はあ、はあ……ぐっ！」

全身を突き刺される痛みが全身を襲うどうやってここまで来れたかは意識がない既に冥獄神化を解除している為、身体が崩壊していく事はないが使用の反動は確実に自分の身体を痛み付けている

ここは……迷路のように広がる円形をした立場に自然豊かな場所であるダンジョンであるバーチャフォレストだった。ボロボロの身体を鞭を打ち紅曜日を杖の代わりに要約立つことができた。あの謎の美女の放った一撃と自分が放った一撃はなんとか相殺したその周囲である山は消滅してしまいましたがあのまま何もなかったらプラネテューヌ又は間違いなく吹き飛んでいた

何回目になるか分からない吐血したところで地面に倒れてしまった。びくりとも動かない身体に何度も動け！と命令するがうんともすんとも言わない

「……ま、ずい」

今の自分は羽根をもぎ取られた鳥以下だ、ただ周囲に天災の種を撒き散らす自分は辺りのモンスターを無差別に凶暴化させてしまう幸いなことにここは最深部にあたる所だがここは街との距離はかなり近いもし自分が汚染させたモンスターが街に降りてしまったらと考えるだけでぞつとする

「は、やく。は、やく……！」

ここから離れないとみんなに迷惑がかかる自分は本来ここにはいてはいけない存在なんだだから動いてくれ！

「兄貴ここに誰か倒れているぜ」

誰かの声がした顔を少し上げ視線を上げると男女の二人組、一人は鼠色の肌を耳が尖って吊りあがった瞳が特徴的な女性と全身自分と同じ黒のコートを纏った男性

「！……そうだな」

自分を見た瞬間息を飲むような声を出す男性は紅夜を見下ろす

「動けねえようだし金モノでもいただいでいくか？」

やばい、自分も金モノになりそうなのは間違いなく紅曜日と緋壊螺だこれは友人に貰った大切なモノそれを奪われたそんなことになればアイツに合わす顔が無い

「……俺は反対だ。無駄にここは汚染モンスターが多い（・・）そんなくだらないことをしている暇があったらゲームキャラを壊してとつとと帰りたい」

隠された顔でも分かるめんどくさそうな雰囲気を放つが紅夜に頭に引っ掛かる単語があったゲームキャラ（……………）

「……………！」

思い出した確かゲームキャラは各国一つ一つに存在し秩序と循環を司る存在、時には女神たちを助け悪を滅ぼす力を秘めているという話だったアイツが作りだした保険のためとゲームギョウ界に作ったシステムだと聞いたことがある。それと同時にま、自分の前にいるのはそれを壊す存在……………即ち敵！

「うわあ、なんかもがき始めたぜどうする兄貴、楽しめたほうがいいんじゃないねえ？」

「……………それだけ生きたいという気持ちが多いんだろうこういう何があっても生きようとするやつ、俺は好きだゲームキャラを壊したら街ぐらいには届けてやるう」

敵が目の前にいるのになんで動かないこいつがネプテューヌをノワールをベールをブランを傷つけた奴かもしれないのになんで動かない！くそ、くそおおお！！

「それじゃ、行こう。リンダ（……………）」

「……………兄貴だけだぜ私を名前で呼んでくれるのは」

敵である二人の背中を俺はただ見続けることしか出来なかった

何もできない（後書き）

下っ端^{シンド}は苦勞人で常識人というイメージがある

次回はいいよ原作主人公の登場！そしてバトルあるよ紅夜も動くよ

因みに黒コートの方は四女神ボコった人と同じです

絡む運命 前編（前書き）

更新速度が遅くなるばかりそして駄文……短い

絡む運命 前編

目を瞑ればまたあのときの光景がよみがえる

地にひれ伏されたブランさん

地面に叩き付けられたノワールさん

後ろからの攻撃に倒れるベールさん

そして異体の拳に宙を舞うお姉ちゃん

私はそのときただ隠れて見ていることしか出来なかった。

私はお姉ちゃんみたいに強くないから私はお兄ちゃんのように強くないから

そして私は何もできないまま捕まった、アイエフさんとコンパさんのおかげで私は助かったけど思ってしまったもしあの時、助かったのは私じゃなくてお姉ちゃんだったりしたらもっといい状況になっていたかもしれない……って

ポカッ

「あいたっ!」

突如横から振り下ろされた鉄拳は私の頭に直撃した。俯いていた顔を上げるとそこにはむっとしたアイエフさんの貌だった

「あんた、まさか自分が助からない方が良かった……なんて思って

ないでしょうね?」

……思考を撃ち抜かれた気分でした

「はあ、あなたネプ子のように少しはポジティブになりなさい。なんとかなるわよ」

アイエフさんにしては珍しい根拠のない言葉でした。なんとかなる……じゃ無理だと思うあの黒いコート、おねえちゃんが女神達が一斉に立ち向かって倒せなかったあの……幽霊のような人には

ドゴーーーーン!!!!

突如、爆発音と共に地震が起きたかと思うほどの揺れが私達を襲いました

「きゃあああ! なにか隠れるところはどこですか! ?」

近くの物に捕まり振動が収まるのを待ちます。多分その震源はこの先だということが感じられ私達は目を合わせお互いに寒気を感じました

「先を越された!」

アイエフさんの言葉に私達は一斉に走り出します。いーすんさんの情報によればこの先にゲームキャラが居るはずですが犯罪組織マジユコンヌがゲームキャラの存在をどこかで知り壊しに来たのだと私

達はその時、確信しました

そして開けた場所に出てその先には原型をとどめていない粉々に破
壊されたモノと

—————お姉ちゃん、女神たちを圧倒した黒いコートの人がい
ました

「なんだテメエらは？」

兄貴の一撃でぶっ壊したされたゲームキャラを見て優越感に浸っている三人組の誰かが走ってきた

「あれは……」

兄貴はその三人組を見てなにか身に覚えのある奴を見たような声を

零した

「兄貴、まさかあの中に好みの奴がいるのか!？」

「なぜ、そんな考えになるんだリンダ？」

一息を付かせないツッコミは更に私の不安感を沸きださせる

「やつ、やっぱり兄貴は胸が大きい奴が好きだったんだ……!」

とくにあの注射器持っている奴!服の上からでも分かるだなんて……
…う、羨ましい!

「おゝい、リンダさん?人の話を聞いてくれますか??？」

私はそれなりに露出度が高い服着ているのに兄貴は全く私を見てくれねえ!

「マジック・ザ・ハード様と仲がいいのもそのせいなんだ!……!」

本当は今日私だけでゲームキャラを壊す予定だったのに買い物中の兄貴と鉢合わせして兄貴曰くマジック・ザ・ハードにアップルパイ作ってくれと頼まれたとか……くっ!

「おれはジャツジを除いてみんなと仲がいいと思うんだけど……!」

「嘘だあ!……!」

私の声と共に気味悪く羽ばたく鳥たち……なんか古い感じがした

「人の話を聞け」

呆れた兄貴から繰り出される鬼のような鉄拳は頭に直撃、それなりに手加減しているのは分かったが兄貴の武器は手甲だから滅茶苦茶、痛てえ

「あの桃色の髪の奴、プラネテューヌの女神候補生だ」

「マジで!?!」

「マジマジ」

兄貴の肯定の言葉はヒロイン全員武士娘のギャルゲーで聞いたことがあるような気がした

「逃げないだろうなあと思っていたけど……まあいいか」

「いいのかよ!」

兄貴は少しマイペースっていうか動揺なんて全然しないよな。うん
うん

「ここでまた捕まえればいい話だしな……」

ある意味で助かったぜさすがに女神候補生を含めて三人相手も相手にするには私じゃ無理だったかもしねえからな兄貴がいるなら百人力どころか一億人力じゃねえか四女神相手に無傷だったしな

「あ、……あああ……!」

ククク、あの女神候補生恐怖に震えてやがるそりゃ、そうだ兄貴勝てる存在なんていねえ女神が最強なら兄貴は最恐だな！

「ちょっと！ネプギアどうしたのよ」

「あの人……です。あの人……お姉ちゃんを女神たちを一人で倒した人です！」

信じられないようなモノを見るような目になった他の二人、兄貴から黒い妖気が溢れだしてきたいきなりそれか！四女神を倒した技……えっと名前は確かゼブル・アンドロメダ魔皇の神域だったな

「マジック待たせておくとあとが五月蠅いからな……とつとと、蹂躪してやるよ」

兄貴の言葉と共に

―――
虚空に瞳が開いた

絡む運命 前編（後書き）

今回の視点はネプギアとリンダでした

リンダ暴走、いまはギャグ中々入れられないですからこんな感じで入
れていきたいなあと思っています。ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9114y/>

超次元ゲームネプテューヌ～絶望はこの身に希望は我が手の中に～

2012年1月6日14時51分発行